

天彗ノ御魂 ～demon slayer alternative～

レティス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ーそれは、誰よりも天を翔び、彗星と成りて鬼を屠る者ー

天彗龍・バルファルクは、悠久の時を生きた後、ハンター達によって討伐された。

そして天彗龍は、少年の姿となって生まれ変わる。しばし平穏な時を過ごしていたが、「運命」は…古龍としての因果はそれを許さない。前世で『銀翼の凶星』と恐れられていた自分に、災厄はいつも訪れる。鬼の蔓延る日本で、天彗龍…否、豪鵠森羅は刀を握る。鬼を滅する者…鬼殺隊となりて。

お伽噺は、愛と勇気で出来ている…

目次

選別	鍛練	始動
SPARTAN	BUILD UP	INVOKE
38	18	1

始動 — I N V O K E —

ガキインツ！ ダアンツ！

ザシユツ！

『ギエイアアツ！』

ギユオオオオンツ！！

遺群嶺…それは人の足では決して辿り着く事は出来ない未踏の地。その頂、浸る水面に龍気が洩れた高地にて、俺と狩人達は互いに殺し合っていた。

狩人達が剣や弩を構えて攻撃してくる中、俺は翼脚から龍気をジェット噴射しながら高速で狩人にぶつける。体と翼脚に繋がっている靱帯は伸縮自在。そのリーチは斬竜の尾も凌駕する。超音速で放つ槍、それは“常人”が受けようものなら一瞬で体が四散するだろう。

「はっー！」

だが“狩人”はその常人の内には含まれない。獣や竜を屠る彼らは、確実に獣を狩るために様々な技を繰り出してくる。

狩人の一人は俺の翼脚の一突きを錐揉みに回転しながら擦れ違った。

一人が弩を打ち続ける中、一人は太刀を振り、一人は大剣を叩きつ

け、一人は薙刀に張り付いた虫を俺目がけてぶつけて体液を吸い上げる。

俺は龍だ。それも空を飛ぶ飛竜や陸地に特化した獣竜の比ではない。古より猛威を振るう古龍だ。その生命力は人間や飛竜らを上回る。

ザシユツ！

『ギユアアアツ!?!』

されど戦いの蓄積で、俺の命は既に風前の灯火だった。紫外線から身を守る銀色の甲殻はあちこちがボロボロ、翼脚からの龍気噴射の勢いも衰えてきた。いくら古龍の身とて、このままでは身が持たない。

キユイイイイイイインツ…!

俺はその場で呼吸を行い、体内に大量の酸素を取り入れる。胸部の肺胞に、離陸するための龍気を生成するために。こんな弱りきった体では彗星の如き突貫は出来ん。離脱可能な程度の酸素を…

「せいいいっー!」

ドゴオツ!

『ギャオアツ!?!』

バチバチイ！……ドガアアン！！

刹那、その隙を見た大剣使いの狩人が、大剣を地面に引きずりながら斬竜の如き斬り上げを胸部に叩き込んだ。衝撃で呼吸が乱れた結果、生成中の龍気が胸部で暴発した。

全身に渡って痙攣が起こる。視界が揺らぐ。もはや逃走は叶わぬ。俺が死ぬか、狩人が死ぬか、結末はどちらか片方だ…。

『キユイイイイイアアアア!!』

俺は助走を付けながら体内に残る龍気を翼脚に集中。勢いよく噴射しながら特效を仕掛ける。一発の弾丸の如く、速度を増しながら、狩人達目がけて…

ザシユツツツ…！

『ガア……い！』

練気解放気刃斬り…：円月殺法の構えから放つ居合い斬り。太刀使いの一閃は、確実に音速で突貫する俺を斬り裂いた。

斬り裂かれた。俺の心臓の部分は確実に斬り裂かれた。呼吸する術を失った俺はそのまま推進力を失って墜落。何度か転がった後、倒れ込む。

『キユオオオオオオオン…………。』

力を振り絞って立ち上がるも、既に散り逝く身。翼脚から出る龍気は弱々しく、徐々に小さくなっていく。心臓や肺胞を潰されてはもう動きようがない。後は骸になるだけ……

悠久の時を生きてきた俺だが、とうとうここまでか……

これが…………自然の摂理か……

—————

「はっ…!?!」

俺が目覚めると、そこは何処かの部屋の中だった。どうして俺はこんなところにいる…? 狩人達に仕留められて、俺は二度と目覚めなはずだった……。

俺は自分の体を確認してみた。十の年を経た少年の体だ。妙になれない感覚だと思っただが、人間の身体になっていたのか…? となると、俺は生まれ変わったって事か…。

ここは何処だ? 和装って事は俺が覚えてる辺り、ユクモの地なのだ

ろうか？

「……は……。」

俺は体を起こし、部屋を見渡す。襖は閉ざされている。俺のいる寝室には布団以外には必要最低限なものしかない。夜間用の蝋燭くらいだ。

「ん……？」

「あつ……！」

ふと襖が開いた音が聞こえた。俺はその方向へ顔を向けると、そこには緋色のショートヘアの少女が襖から俺を覗いていた。少女は俺が目覚めたのを確認するや否や、何処かへ駆け出していった。恐らく彼女の両親のところだろう。

数秒後、その少女は両親を連れて俺のいる寝室に入ってきた。

「おお、ようやく目が覚めたのかい。」

「えつと……俺は……どうしてここに？」

「貴方が森の中で倒れているのを、梨那〃が見つけてきたのよ。」

梨那と呼ばれた緋色の髪の少女が俺を見つけてここに運んでくれたようだ。どうやら俺が人に生まれ変わって倒れてた場所は見知らぬ森の中だったらしい。あのまま見つけてくれなかったら、俺はとつとつに獣に喰われていただろう。

「ありがとう、梨那。」

「うんうん……厳密に言うくと、私一人じゃ運べなかったから、一旦お父さんを呼びに戻ったの。」

「いや、助けてくれた事には変わらないよ。」

俺は自分を助けてくれた梨那とその両親に礼を言う。

「ところで、君は何処から来たんだい？」

「…分からない。そもそも、俺に親すらいたすらかも分からない。」

梨那の父と問いに答える俺。勿論これは嘘だ。前世は龍だった俺に親の概念なんて存在しない。飛竜や牙獣等ならいたかもしれないが、桁違いの寿命を持つ古龍に家族等存在するはずがない…いや、俺にもいたかもしれない。

「もしかして、記憶がないのかい？」

「…はい。」

俺は静かに呟きながら頷く。記憶がないと言ったら嘘になる。だが、この記憶は他人に話せるものではない。

「もしよければ、うちの家に住んでいくかい？」

「いいんですか？見ず知らずの俺を受け入れてくれて？」

「ええ、記憶も住む場所もないなんてとても不憫な事だわ。」

出会ってそこまで経ってないにも関わらず、ここまで厚く招かれるのには俺自身驚いた。前世は人ですらない俺を、見知らぬ俺を家族として迎え入れようとする姿勢。とても温かさを感じた。

「はい、これからお世話になります。」

俺はその歓迎を受け入れた。梨那とその両親の微笑みと共に家族として迎え入れられた俺。その喜びに前世も何も関係なかった。

「そういうえば、君の名前はなんて言うの？」

「…えっ？」

唐突に梨那に尋ねられた俺自身の名前。前世では龍であり、専ら狩

人達からは天彗龍か、バルファルクとしか呼ばれてこなかった。この世界で通用しそうな名前ではない。「天彗龍」とは、前世の俺が紅い軌跡を描きながら空を飛ぶ姿が、まるで彗星だという事から名付けられた。そしてバルファルクは、狩人曰く「豪胆な隼」という意味から名付けられたらしい。

そこから俺の新たな名を考えると…そうだな…。

「…森羅…。」豪鵠森羅（たぐち しんら）”。それが俺の名前だ。」

俺は梨那とその両親に自身の新しい名前を言う。この地で通用する名前として、苗字をバルファルクから、本名彗星のある宇宙から取った……つて、あれ？

何で俺はこの知識を知ってるんだ？

—————

俺がこの「昴斗（すばるぼし）家」のお世話になってから、何日か経った。一般的な農民として、田植えや魚釣りなどして働きながら過ごしている。それだけじゃない。俺は家族として迎え入れられてから我流で鍛練を積んでいる。走り込みと腕立て等の基本的な事、そして「呼吸」だ。

古龍だった頃、俺は独特な呼吸法で酸素を体内に取り入れ、龍気を生成して飛んでいた。当然人の身に生まれ変わっているのだから、空を飛ぶ事なんて出来ない。せめて前世で行っていた事を何とか活かせないか考えてみた。

そう考えた末に、一度に大量の酸素を取り込むと体温上昇と共に一時的に身体能力が上がる事が分かった。前世では「空を飛ぶための

呼吸法”だったのに対し、今は“身体能力を向上させるための呼吸法”に変化していった。前世の技も案外捨てたもんじゃやないな。

とはいえ、これを“四六時中出来るのか”といえはそうじゃやない。人間の体に生まれ変わった故に一度に吸い込める酸素量には上限がある。また、大量に酸素を取り込む度に体に痛みが走る。今の身体では呼吸時の酸素量に体が順応しないのだ。

おまけにこれを睡眠の時もやろうとすれば「いびきが煩い」と梨那に枕で袋叩きにされるため、睡眠時は封印。そりゃ、ジェットエンジンの如き呼吸なんて聞いたら睡眠妨害だよな…うん…。

…と、変わった鍛練を積んでる以外は普通の人と変わりない毎日を送っている。

「よし…これで十分だな。」

俺は夕餉用の鮎を人数分獲り、籠に入れて布を被せる。今の季節は夏。この時期は鮎が旬で沢山獲れる。さて、さっさと家に帰ろう。

「森ちゃん…!」

「ん? 梨那?」

梨那がこちらにやってきた。波奏さん(梨那の母)の手伝いをしてたはずだが、終わらせてこっちに来たのか…っつか“森ちゃん”って呼び方、なんかやだなあ…。

最初は森羅君って呼んでたのに、2年前ほどから森ちゃんって呼び名に変わった…その呼び方だと俺が尻丸出しで暴走する5歳児みたいに聞こえてくる。もしくは考えるのを止める警察官のどっちかだ。せめて後者の意味であってほしい。

「そろそろご飯の準備だから戻ってきて〜!」

「ああ、今戻るぞ。」

俺は籠を持って梨那のもとへ行こうとする…って、梨那…なんでこつちに寄つてきた？

「梨那、ここ足場悪いから気をつけろよ？」

「えっ？うわわっ!？」

「お、おい梨那!？」

そら言わんこつちやない。悪い足場に体幹崩れそうじゃないか。

俺は籠を置いてすぐに梨那のもとへ駆け寄る。この川、比較的流れは緩やかだが、いかんせん足場が悪い。川の水の波紋で足場の深さが分かりづらい。だから川を渡る際は細心の注意を払わないといけない。

「きゃっ!?!た、倒れるっ!?!森ちゃんっ!助けてっ!?!」

「動くなっ!?!下の岩がゴツゴツしてるから下手に動いたら…ってうおおおっ!?!」

「きゃあああああ!?!」

ザパアアアアアアンツ!!

結局、二人揃って体幹崩して転倒。川に浸かる事になった。幸い、俺が下敷きになった事で梨那が強打する事はなかった。けど、起き上がらないと溺死する。

「…ぶっはあっ!」

俺と梨那はすぐに川から起き上がる。

「あーあ…盛大にずぶ濡れだなこれ…梨那、怪我はないか？」
「うん…けど、服がビショビショだよお…。」

梨那に怪我こそなかったものの、川に転倒したために俺と同じく全身ずぶ濡れ……………ん？

「あ…。」
「…へっ？」

ああ、なんてこった。倒れた際の勢いで梨那の着ている服がはだけ
ていて、肩と胸部が露出……………あ、やべ…

「…………。」
「…あう…うう…ううう…！」

あれから3年経ち、梨那の身体も成長してきた。慎ましやかながら
凛々しく、そしてまだ小さめではあるが、膨らみが……………あ、やべ…
それ以上は考えちゃいけない。理性が龍気のように蒸散しそうだ
……………って、目視してる時点でとつくに手遅れなんだけどなあ……………

涙目の梨那の顔がどんどん赤くなっていく。そりゃあ、りんごが
真っ赤に熟成していくかの如く…。

「あ、あの…梨那…？」
「……………の…………。」

「わ、悪かったって…それにほらっ、ここの川は足場悪いから転びやす
いからな。いやー怪我無くて良かったよ本当に。」

「…し…ちや…。」
「…そ、それにしても、梨那…。」
「…何…？」

「…随分…『立派な体』になつたな…。」

あつ……しまった……つい口が滑つて

「森ちゃんの……。」

馬鹿あああああああああああああ
!!!!!!

ドゴオオオオンツ!!

「うわらばあ!」

ザツパアアアンツ!!

梨那の会心の一発が俺の顎に直撃。その慎ましやかな体の何処に人間を打ち上げられるだけの力があるのかは知らないが、俺の身体は確実に宙を舞い、そのまま川に着水。更にはずぶ濡れだなこりや…自業自得とはいえ。

「森ちゃんの変態っ!馬鹿っ!アホっ!女の子の裸を見るなんて最低っ!!」

「いつててて……つい口が滑っちゃっただけじゃないか……ん?」

梨那に罵倒されながら起き上がる俺。その際、身体の妙な『浮遊感』に気づいた……?ん?

「浮遊」……………?

「…あれ?」

俺は視線を下に向けると、そこは水面。だが、その距離まではある程度離れている。「滝」から流れ落ちる淡水によって、水面に絶え間なく波紋が走る……………って、滝い!?

「ちよっ!?!なんで滝まで殴り飛ばし!」

ザッパアアアアアアアアアア!!

いや、隙の生じぬ二段構え。

—————

「はあ…帰ったらすぐに着替えないと…。」

「…つつう…:…変な着水したから全身が痛え…。」

「森ちゃんが悪い。」

「…そうだけど、流石に滝まで殴り飛ばすのはやり過ぎだと思う。」

「森ちゃんの自業自得っ!」

「(・_・)」

梨那に罵倒されてしょんぼりとした表情しかつukれない俺。そん

な俺をジト目で睨んでくる梨那。自分でやらかshといてこんな事言うのはなんだけど、かわいい。

そんな事を思いながら、俺は梨那と一緒に家までの帰路を歩く。

「…ねえ森ちゃん。」

「ん…？」

「『あの日』の約束、覚えてる？」

「…えっと…『花火を見に行く』…だっけ？」

「うん、前回と前々回は駄目だったけど、今年こそは森ちゃんと一緒に見に行くって約束。それでさっきの事許してあげる。」

花火か…俺が昴斗家にお世話になって数週間経った日に、梨那に連れられて見に行ったんだっけか。確かに綺麗だった。前世の頃はあんな体験に興味すらなかったのに、人間に生まれ変わってみるとここまで感動するものがあるんだな。

梨那は花火を見る事が好きらしく、夏になるのが楽しみだという。2年前は生憎の雨で中止。そして去年は、その地域に『鬼』という化け物が出没したために外出してはいけないと注意された。

鬼というのは、昔から各地域に出没している人喰いの化け物だ。夜間に動き出し、人間を見つけては喰い殺すという。言うならば、前世でいう俺達のようなモンスターだ。各地に潜む鬼を仕留める『鬼狩り様』という存在がおり、鬼狩り様が鬼を倒してくれるのだという。

鬼が彷徨く夜中に花火を見に行くだなんて自殺行為だよな…けど、俺もあの花火を見て確かに綺麗だと感じた。欲張った言い方だけど、危険を冒してでも目指すものがあるからな。俺がいた世界では常にそうだった。

「分かったよ。俺が梨那を守りながら花火を見に行く。これでいいか？」

「！…うん！」

刹那、俺の言葉を梨那がパアツとした笑顔で浮かべながら俺に抱きついてきた。ちよっ…流石にこれは恥ずかしいぞおい…。

俺は突然の梨那の行動に顔が真っ赤になった。だって俺、恋愛なんて全くした事ないし、そもそも前世に恋なんて古龍の俺には皆無だったからな？いや、古龍同士の恋もあるにはあるよ？けどあるとしたら炎龍しか思いつかねえぞ。

梨那とは幼馴染み程度しか思ってなかったのに、いざ女性として見たらこうも頭がボーツとするもんなのか？

「…森ちゃん？」

「……はっ!?!…えっ…えーと、何だ梨那？」

硬直から我を取り戻した俺。けど声が未だ籠っている。

「もしかして………ゴォーふん〴〵してた？」

ブーーーーーッ!

俺はすぐに梨那のいる方の反対側に向けて鼻血を噴射した。こんな色っぽい声でそんな事言われたらそりゃ鼻血出るよねえ!?

「っ…いきなり何囁いてくるんだよ!？」

「あははっ!冗談だよ冗談。私は先に行ってるね。」

これが冗談ならこんなに鼻血出ねえよ!?!貧血なったらどうすんだよ!?

梨那は笑いながら一足先に帰路を駆けていく………つたく、意外と悪戯好きなのかアイツ…。

俺は手の甲で鼻を拭くと、止まっていた足を再び動かす。

それにしても、梨那がここまでアプローチを仕掛けてくるとは思わなかったなあ…俺は…元は龍という、鬼とは比べ物にならない化け物だっというのに…。

俺は前世の姿を思い浮かべる。古龍だった頃の俺は、狩人…人間達とは殺し合う関係でしかなかった。喰うか、喰われるか。狩るか、狩られるか…そんな世界の中、悠久を生きてきた。

俺が人間に生まれ変わって、最初に昴斗家に出会った時、そんな殺意…というか、怨念は不思議と浮かんでこなかった。むしろ温かさを感じた。何故だろうか…前にもこんな感情を抱いた事があるような…。

バサバサバサツ！

カアー！ カアー！

「っ!？」

大量に森から飛び立った鴉の群れと同時に、俺は驚いた。いや、別に鴉の群れと鳴き声に驚いたんじゃない。俺の第六感と前世での経験が疼く…

災厄が訪れる時は、いつも「黒い翼」が空を舞う。

「…まさか…!?」

前世では災厄…古龍が現れる前兆としてガブラスが空を舞う。もう夕日が完全に隠れる寸前である事、鴉の群れが何かに恐れを成して飛び去っていた事、そして鴉の群れがいた木々の先には…!

「きゃあああああああああ!!」

「っ!?!梨那っ!!」

的中した。いや、的中してしまった。梨那の悲鳴が確かに聞こえた。俺は咄嗟に走り出す。ジェットエンジンの如き甲高い呼吸で酸素を取り込みながら、俺は帰路を全力疾走する。

鬼だ。こんな世界で不吉な予感を催す存在と言えば、もはや鬼しか考えられない。走れ…!龍気が使えなくても…翼が無くても…この足で…!

一秒でも速く家へ…!

—————

「はぁ…はぁ…………っ!」

全力疾走の末、息を切らしながら家に到着した。

「っ…そんな…!」

俺の視界には、文字通りの地獄絵図が広がっていた。滅茶苦茶に散らかされ、万遍無く返り血をぶちまけられた室内。障子戸は踏みつけられたかの如くへし折られており、家具は片手でリングを潰された状態のように跡形もなくなっていた。

目の前には二人の死体。波奏さんと泰山さん……梨那の両親だ。そして二つの死体を貪る「何か」……蒼白い肌に、竜人族のような耳、そして牙……

「ん…?人間かあ?餌になる人間がやってきたなあ。」

「!!」

鬼だ…鬼が、我が家を襲っていた。

鍛練 — BUILD UP —

この光景を信じたくなかった。

目の前の光景を信じたくなかった。

俺の視界に映る、梨那の両親を喰らっている鬼の姿を。
今まで続いていた日常が“理不尽”という悪意に、塵一つ残らず焼き尽くされた事を。

「あ……あ……ああつ……！」

凄惨な光景に絶望する俺。そんな俺を罨に掛かった獲物のように見る鬼。

これは、運命が振り撒いた悪意の塊なのか、それとも災厄を呼び寄せる古龍としての因果なのか、俺には分からない。だが結果的に、鬼という災厄が昴斗家に降りかかってしまったのは確かだ。

「波奏さん……泰山さん……！」

失ってしまった。血が繋がらなくとも、俺を我が子のように面倒を見てくれた義両親を。

ほんの数時間までは生きていたはずなのに、今は辺りに血液と肉と内臓と骨とを撒き散らした物言わぬ肉塊と化した

目の前の存在によって…

「んん？寄ってきた“餌”の癖に何ごちやごちや言ってんだあ？」

「餌」だと…？俺が…波奏さんが…？泰山さんが…？

梨那が…「餌」…だと…？

「……………っ!!」

絶望に染まった顔から一転、その一言で俺の顔は徐々に強ばっていき

俺達を餌と表現したあのクソ野郎を許せない。許してはいけない。殺してやる…!!

俺はふと地面を見ると、そこには刃に血がついた鉞が落ちていた。泰山さんの最期の抵抗だったのだろう。鬼に最期まで足掻いて死んでいった、泰山さんが薪割りに使っていた鉞。

「…。」

言うまでもなく俺は鉞を手取る。鬼を殺すには十分だ。泰山さんを…波奏さんを殺したあのクソ野郎をここで

殺す

!!!!!!!

「ケケケツ…！お前も喰ってやるっ！」

「っ…ふざけるなあああああああああああ!!!」

龍の咆哮にも似た怒号を轟かせながら、鉞を構えて鬼に突撃する。渾身の力を腕に、鉞に込めて、その刃を鬼にぶつける。

ザシユツ！ ザシユツ！

鬼から返り血が飛ぶが、知った事か。俺の義両親を殺したこいつを生かしてはおけない！

「うおおおおおっ!!」

ここで必ず仕留める。それまで、鉞を振るうのを止めない！

ガキンッ！

「っ!？」

「ケッ！煩いだけの餌があ。」

鉞が頸に当たったところで、弾かれた。確かに今まで刃が鬼の肉体を裂く感覚はあった。出血と切り傷を負っている限り、手応えはあった。常人なら確実に即死するだろう一撃だ。それを何度も繰り返した。だが、鬼は違う。

手応えはあったが、妙にピンピンしている。それに、こいつの頸は硬い…！まるで鉄塊を叩いているようだ…！

「鉞で鬼を殺せると思っっているのかあ？」

「っ…!？」

一瞬で…傷が塞がった…!?!常人なら即死の攻撃を受けて平然としていて、頸は鉄塊並、おまけに自然治癒力まで非常識なのか…!?!

「シャアッ!!」

「うっ…!？」

瞬間、飛びかかってきた鬼に対応出来ず、俺は倒れて鉞を手放してしまう。

「ケケケツ…！あの逃げた『メス餓鬼』の方が好みだったが、仕方ねえ。お前の頸をへし負ってから喰ってやるとするかあ…！」

あいつの言葉から察するに、梨那は逃げ切れたらしい。けど、鬼に捕まって身動きが取れない…！

くそ…！せめて… 『前世の力』 が使えれば…！

ブオン！ バキイイツ！

「グギャツ!?!」

刹那、鬼の横から棘鉄球が飛んできた。鬼はその鉄塊並に硬い頸ごと頭を粉碎された。さっきまで俺を拘束していた胴体は脱力して倒れた。そして頸の方から黒く炭化していき、やがて消滅していく。

「少年、怪我はないか。」

「あ…はい。」

その白目の男性は筋骨隆々な巨体を持ち、黒い隊服に『南無阿弥陀仏』と書かれた羽織と数珠を着け、鎖で繋がった棘鉄球と手斧を持った僧兵のようだった。鬼を倒す手段が見つからなかった俺にとって、色々な意味で奇跡とも言えるタイミングだった。

「……どうやら、一足遅れてしまったようだ。申し訳ない。」

俺の気持ちに共感しているのか、元々涙脆いかは知らないが、その男性は俺の義両親の亡骸のある方を向いて白目から涙を流していた。何か忘れて………はっ!? そうだ!

「そうだ……梨那は何処に……っ!?」

先程の鬼の発言から、梨那がまだ生きている事を察した俺は、思い出したかの如く梨那の軌跡を探る。

恐らく、梨那も同じ光景を目の当たりにして何処かへ走り去っていったに違いない。探さないと……!

「少年……何処へ行くのだ?」

—————

「梨那っ!?……どこにいるんだ!?! 梨那!?!」

俺は梨那の名前を叫びながら森の中を走る。頼む、無事でいてくれ。梨那!

夢中で梨那を探して森を進む内に、小道に出る……ん?

「この足跡は……!」

俺は小道についた足跡を見る。かなり慌てて走ったような痕跡らしい。こんな夜中に慌てて走るとしたら……間違いない、梨那の足跡だ……!

俺は足跡を辿りながら梨那の後を追いつける。しばらく走っていると、足跡が左の茂みの方に向いていた。だが、強引にかぎ分けられ

た形跡から、梨那が鬼からの追跡を逃れるように進路を曲げたらしい。そつちに行つたんだな、待つてろよ、すぐ行くから…！

「待つてろよ、梨那…！」

梨那の両親は死んだ。今俺に残っている最後の希望はただ一つ、梨那だけだった。俺はかぎ分けられた茂みを辿っていく。そしてその先には

「はあ…はあ…。」

その先は崖だった。向かい側の崖には同じように森が広がっていて、そして崖の下には川が流れていた。だが川の流れるは速い。もし梨那が…崖から落ちてたりしたら…

「梨那…？」

俺は不安で一杯の中、梨那の名を呼ぶ。梨那、出てきてくれ。俺が…森ちゃんが迎えにきたぞ。だから、出てきてくれ。その辺りで隠れてるんだろ？

………

………

返事は返つてこない。川の流れるが聞こえるだけだ…まさか、本当に崖から足を滑らせたんじゃないよなあ…？

そんなはず無いよな…？

「……あ。」

地面に何か落ちていた。それを見つけた。いや、見つけてしまった”。

俺はそれを見つけないければどれだけ理想を追い求め続けられたか。

そこには、梨那が大事にしていた「髪留め」が落ちていた。俺があげた、梨那へのブレゼントが。

そして近くには、「崖の先端が欠けた痕跡」があった。

「あ……ああああ……。」

それを見た瞬間、最後の希望は儚くも、消え去ってしまった。水底に沈んでいってしまった。

「梨………那………ああ………！」

「少年、唐突に走り出してどうしたと……少年？」

後ろから先程の巨体の男性が後をついていたようだが、今の俺には何も聞こえなかった。

梨那が崖から落ちた。崖の下は激流だ。落ちて助かる保障は何処にもない。

今ので確認した。梨那は

「…。」

俺の手には数珠の代わりに梨那の髪留めが握られている。あの日、梨那にあげた髪留めだ。この惨劇が起きた今日まで、彼女はずっとこの髪留めを大事にしていた。それが…今日から一転して梨那の形見になってしまった。

「…それは…？」

「…幼馴染みに…梨那にあげた髪留めです…。今日まで…ずっと持っていた…梨那の…形見です…。」

脱力した状態のまま、弱々しく答える。

「…俺のせいだ…俺が…梨那と一緒に行っていれば…少なくとも梨那は失わずに済んだのに…。」

「否…君は家族を失ってまで、鬼に立ち向かった。だが世は残酷にして非情。仮に少女を連れていたとして、結果は変わらなかっただろう。この闇夜故だ…幾多の鬼が潜んでる可能性も否定出来ない。」

梨那を先に自宅へ行かせてしまった事、一緒についていかなかった事への後悔が俺の頭の中にあつた。しかし、巨体の男性の言う通り、鬼はあの一体だけじゃない。各地に数多く潜んでいる。あの森に何体も隠れてる可能性も否定出来なかった。梨那が別の鬼に喰い殺された可能性もなくはなかっただろう。最終的に彼女は崖から転落して激流に飲み込まれた。喰い殺されようが、水底に沈もうが、死んだことに変わりはない。

「…あの…。」

「悲鳴嶼行冥と申す。」

「…豪鵠森羅と言います…。」

今更ながら名前が判明した悲鳴嶼さん。俺も自身の「今の名前」を名乗る。

「…悲鳴嶼さん…鬼を仕留めるには…どうしたらいいんですか…？」

「『鬼殺隊』への入隊。それが鬼を狩る唯一の方法だ。」

「鬼殺隊…？」

「そうだ。君は実際に鬼との戦いを生き抜いた。その勇気、その闘志、鬼殺隊に必要なだ。」

鬼殺隊…初めて聞いた単語だが、それが今日まで噂されていた「鬼狩り様」の正体なのは確かだった。文字通り鬼を狩る集団…前世にて、俺達のような龍や獣達を狩猟する「ハンター」に似た存在だった。鬼を仕留める術を知るには、鬼を狩るハンター…鬼殺隊に入れという事だろう。皮肉だよな…前世ではハンター達に討伐された俺だが、今世では鬼を討伐するハンターになるというのは…。

「だがそのためには、相応の修練が必要不可欠。刃の如く腕を磨き、鋼の如く耐えればならない。」

「だったら…俺を弟子にしてくれませんか？お願いします！」

鬼殺隊に入るためには相応の修練を積みなければいけないのだという。

俺は悲鳴嶼さんに弟子として引き取ってもらえないかお願いする。しかし

「生憎だが、それは出来ない。」

「何故ですか…!？」

「私はこの僅かな時をも鬼との戦いに割かねばならない。故に、君を弟子に取る事は出来ない。」

「…。」

悲鳴嶼さんに断られた。確かに、最前線で活躍する隊士故に少しの時間も惜しいのだろう。それは仕方ない事だ：けど、どうすればいいんだ？もう当てがないというのに…

「岩柱殿、俺がこの少年を鍛えよう。」
「？」

刹那、何処からともなく壮年の男性がやって来た。歴戦の雰囲気
を催す顔付きだ………ってか、「岩柱」？この人、悲鳴嶼さんの事を
「岩柱」って言ったか？

「えつと…貴方は…。」
「俺は彩峰閃武。鬼殺隊に入る者達を鍛える『育手』だ。」
「豪鵠森羅と言います。」

互いの名前を名乗る俺と閃武さん。また分からない単語が出てき
たが、どうやら俺を弟子として引き取ってくれるらしい。

「鬼を屠る術を知りたいか？少年。」
「…はい！」
「その心意気はよし。」
「私からもお願い申す。彼は亡き家族のために、鬼殺隊に入る志を宿
している。」
「承知した、岩柱殿。」

悲鳴嶼さんからの推薦も貰い、弟子として迎え入れてくれる事が決

まったようだ。

「豪鵬森羅。精進の果てに最終選別を乗り越え、無事に鬼殺隊に入れる事を祈る。」

そう言うと、悲鳴嶼さんは棘鉄球と手斧を持って、何処かへ去っていった。別の地域へ行つて鬼に狩るのだろう。

「さて、俺達も行くぞ。ついてこい。離れたら命は無いと思え。」
「はいっ！」

俺達もすぐに出発する事にした。この真夜中だ、もしはぐれたりしたら鬼に喰われる事は確実だ。

俺と閃武さんは闇夜の中、全力疾走で道を走り抜ける。その度に、元昴斗家から遠ざかっていく……さようなら、泰山さん……波奏さん……梨那……。

—————

閃武さんは恐らく還暦はいつてるだろう。にも関わらず、俺を遠ざけんとばかりのハイスピードで疾走していく。身体能力を向上させる呼吸をしないと絶対にはぐれてしまう。先程育手と言っていたが、それ以前は現役だったのだろう。

夜中の田んぼ道を走り抜け、やがて山を登る。そして登り続けた先には、小屋があった。

「ついたぞ。ここだ。」

「はあ……今日は何回速く走ったか……はあ……。」

「どうやらここが修練のためにお世話になる場所らしい。家に急行する際、梨那を探す際、そして閃武さんについていく際の合計三回は速く走った。」

「本来だったら今から走り込みだったら、こんな夜中だ。今日は休め。」

「は…はい…。」

「本来だったら着いた途端走り込みだったの!? まじか…けど、それが鬼殺隊に入る上での常識なんだろう…多分。」

「俺達は小屋に入る。中には必要最小限なものしかないが、修練する上ではそれで十分だろう。」

「あの…。」

「何だ?」

「鬼殺隊とか、鬼とか、柱とか、俺には今初めて知った事が多いです。教えてくれませんか? 鬼が蔓延る世界がどうなっているのかを。」

「各地に鬼が潜んでいる事自体は前から知っていた。だが、詳細な事までは全く知らない。あの場で分かった事は、鬼の生命力が前世における古龍並である事、度々言い伝えられてきた鬼狩り様の正体が鬼殺隊という組織である事、それぐらいだからだ。」

「…いいだろう、修練をする前に鬼殺隊の知識を頭に入れておいた方がいいからな。」

「俺が詳細を教えてくださいようお願いしますと、閃武さんは了承した。」

鬼：それは700年前以上から存在する人喰いの化け物。その身体能力、再生力は異常な程高く、四肢を切断されてもすぐに再生してしまうという。おまけに通常の方法では如何なる手段を持つてしても死なない不死身の身体を持つ。

鬼殺隊：それは、闇に紛れて鬼を斬る政府非公認の組織。彼らは生身の身体で鬼に立ち向かう。鬼のように傷の治りは決して早くはなく、四肢を失えば二度と元に戻ることはない。『身体は数あれど我が物は一つ』。それでも彼らは人々を守るため、人知れず鬼に立ち向かう。

鬼を仕留める方法は二つ。太陽の光を浴びせる、もしくは太陽の光を吸収した鉄で造られた特殊な刀・『日輪刀』で頸を一刀両断する。この二つだ。

鬼殺隊の目標：それは鬼の始祖たる鬼舞辻無惨の討滅。全ての鬼は、無惨の手によって作られるという、鬼というよりは屍人に近いものだ。

そして無惨の血を分け与えられた、鬼の中でも格段に強い12体の鬼は『十二鬼月』は古龍と同じく超常現象を引き起こす血鬼術を用いるという。弦月にちなんで下弦と上弦に半分に分かれており、上弦はここ数百年討滅の例がないという…。

俺は前世で無惨に似た存在を知っている。黒蝕竜：そして成体である天廻龍だ。奴らが撒き散らすあの黒い鱗粉・狂竜ウイルスに侵された者は『動く屍』となる。そういった点では無惨と天廻龍は類似した部分がある。

柱：それは鬼殺隊の中でも特に優れた戦闘能力を持つ、戦力の中核を成す精鋭中の精鋭。鬼殺隊の中で実力が軒並み高い者から選ばれるらしく、伝統として、最大人数は決まって9人らしい。

鬼殺隊への入隊志願者達を鍛える『育手』は、柱として現役で活躍していた者達が多い。そのため、鍛練は育手の下で研鑽する事が望ましいとされる。稀に我流で鍛練した者が最終選別をクリアして入隊した例もあるが、大抵は質の低さで最終選別で死亡。入隊しても初陣で殉職する事が殆どだという。

ちなみに、俺を助けてくれた悲鳴嶼さんも「岩柱」という柱の一人らしい。

柱は鬼殺隊の中でも最強の隊士。その中でも岩柱が最強なのだという：別に声が似てるからって訳じゃないからな？

つまり、俺はあの時に最強の柱と出会ったという幸運を貴重な体験をした訳だ。幸運なのか不幸なのか、惨劇を目の当たりにした俺には複雑でならなかった。だけど、悲鳴嶼さんのおかげで俺は生き延びれたのは確かだ。

「森羅、一つ問うぞ。お前は「鬼」はどう思っている？」

「敵です。この世から…いえ、この世に成してはならない敵です。鬼は…俺の家族を…全てを奪った。」

即答。鬼に対しての答えなど当に出来ている。いや、鬼共がその答えを植え付けた。俺は一夜にして全てを失った。だがまだ生きている…悲鳴嶼さんのおかげで。

だから奴らと戦う事が出来る。鬼殺隊に入って…人を喰い散らす鬼共を屠るために…。

「鬼殺隊を志す者の大抵はそういう者が多い。鬼に家族を喰われた子供達。入隊理由の第一が鬼への報復だという。だがな、森羅。」

「何ですか？」

「お前の中には鬼とは「比較にならない恐ろしいもの」が宿っている。」

「っ!？」

見抜いていた…!?俺の前世が人ではなく龍である事に…!?

「いいか?確かにその心意気はいい。だが復讐に染まる事だけは絶対になつてはならない。分かったな?」

「…はい。」

冷や汗を掻きながら、俺は返事を返した。俺の前世が何なのかを見抜いたような発言：閃武さんが現役の頃に“何”に遭遇したのか、俺には分からない。だが少なくとも、“鬼よりも恐ろしいもの”に遭遇したのは確かだ。

「…分かったら早く寝ろ。明日から地獄の鍛練の開始だ。言っておくが、鍛練は厳しいぞ。下手したら“死ぬ”からな。」
「はい…。」

俺はそう言われて布団に入る。下手したら死ぬと言い切る程だ。相当厳しいのだろう。

眠り落ちた俺は夢の中だった。

前世の姿の俺が青空を飛びながら遺群嶺へ飛翔していく夢、昴斗家での幸せな日常を描いた夢、“銀色の軍刀を帯びた青年”と共に戦場を駆ける夢だった…ん？

いや待て…あの青年は誰だ？俺の記憶は古龍の前世と人間に生まれ変わった今世の二つだ。あの青年と戦場を駆けた記憶は何処にもないぞ…？

あの記憶は…何だったんだ？

—————

まずは言われた通り走り込みを行い続けた。とにかく走り込み、基礎体力を向上させる。

走り込む距離は日に日に長くなっていき、一日に山を一往復するのが当たり前になる程だった。次第にあちこちに罠が張り巡らされるようにもなった。無論、その罠は本物の凶器であるため、下手すれば死ぬ程痛いどころか本当に死ぬ。

数カ月が経過したら、今度は刀の素振りも行うようになった。刀を振る9つの基本動作を踏まえて、それぞれの方向に何百、何千、何万と刀を振った。

日輪刀を用いて頸を切断しなければならなかったため、左右への薙ぎ払いが基本戦法になる。

鬼を殺せる武器たる日輪刀は、強度的に普通の刀と変わらない。故に横から強い衝撃を加えられるとあっさる折れる。

刀に真っ直ぐ力を込める事。刃の向きと込める力は完全に一致しなければならぬ。そのため、刃の向きと力が少しでもずれたら刃毀れ、刀身がへし曲がる、最悪刀がポッキリ折れる。

「これは覚えておけ。刀に刃毀れ一つ起こしたら骨が〃103本折れる〃と。」

「いやあんたは鬼かつ!?!」

「人間には〃215本〃も骨があるんだ。刀一本に対して骨103本は妥当だ。」

この人、〃鬼〃どころか〃死神〃じゃねえか…。いや分かりますよ？鬼との戦いで刀に自分の命預けてるってのは分かりますよ？刃毀れ一つで骨を103本って…。つまり、刃毀れ二つで全身骨折…即死じゃねえか。

また数カ月経過したら、更に受け身の特訓も行うようになった。閃武さんの攻撃で転倒しまくって、そこから素早く起き上がる特訓だ。鬼は人を喰うために執拗に襲いかかってくる。万が一攻撃を喰らってもすぐに態勢を立て直す速度を身に付ける。そこから更に、俺が刀を構えて、素手の状態の閃武さんに突撃。言うまでもなく投げ飛ばされてそこから受け身を取る特訓も行った。

閃武さんは何回も言った。『地面につく前に着地しろ』と。俺は足払いを喰らった際の勢いに乗り、そこから全身を同じ方向に捻る事で姿勢制御しつつ地面に着地する事に成功する…

それでも追撃で転ばしてくるか、もしくは掴んで投げ飛ばすなりしてくるが。

――――――
全集中の呼吸：それは鬼殺隊が鬼狩りを行う上で最も重要な技術。著しく増強させた心肺により、一度に大量の酸素を血中に取り込んで瞬間的に身体能力を向上させ、鬼と同等の力を得た上で型に沿った必殺の剣戟を放つ。

型にはそれぞれ流派があり、そこから更に派生していくのは珍しいことではないという。

変幻自在で相手に苦痛を与えずに仕留める技を持つ『水』、力強い踏み込みから間合いを詰めて最大限の苦痛を与える斬撃を放つ『炎』、筋力に物を言わせた上で頑強な防御も行える攻防一体の『岩』、鎌鼬や竜巻の如く荒々しく斬り刻む『風』、脚に力を入れて瞬間的に鬼の頸を断つ抜刀術主体の『雷』。この五つが基本の流派だという。

身体能力を向上させる全集中の呼吸：俺が前世から行っていた呼吸がこれと似ていた。やはり三年前に呼吸の特訓をして正解だった。ちなみに、今までは睡眠妨害からの配慮から四六時中は出来なかったが、閃武さんに弟子入りしてからはお構い無しに行っている。

ちなみに、閃武さんは現役時代は『風柱』だったらしい。つまり俺は風の呼吸の型を教わるって事だ。

俺は閃武さんから風の呼吸の型を教わる。風の呼吸の型は全部で9つだ。どれも荒々しい動きから鬼を斬り刻むものが多い。呼吸の際に「シィアアアア」と旋風のような声が聞こえた。そして剣戟の際、風のようなエフェクトが見えたが、それは決して演出などではなく、使い手によっては剣速と技量次第で鬼を斬り裂く本物の竜巻や鎌鼬となる。速度と範囲：所謂手数に優れた型だ。この動き、かの風翔龍を彷彿とさせるものだな…。

「よし森羅、これを一週間で全部習得しろ。」
「ふあっ!？」

無茶苦茶だ：見ていきなり真似した上で一週間で習得って：やっぱりこの人、死神じゃないか。本当に…。

—————

閃武さんのもとで修行してから2年の月日が経過した。全体的に理不尽な特訓が多かったが、それでも耐え抜いた。鬼殺隊に入って鬼と戦うために。

その修行中、俺は独自の呼吸の型を編み出した。その名も『宙（そら）の呼吸』。この呼吸の特徴は、高低差のある戦いと空中戦に優れている事だ。まだ未完成ではあるが、実戦投入できるものがいくつかある。

宙の呼吸の研究をしつつ、鍛練に明け暮れた。そして…

「よく俺の修行に耐えたな、森羅。」

「はい…!」

「この時が来たな、『藤襲山』での最終選別へ行く事を許可する。」

ついにこの時がやって来た。藤襲山という場所での最終選別。これを達成すれば俺も鬼殺隊の一員となる。

「いいか森羅、この最終選別を成したら終わりじゃない。そこからが本当の始まりだ。絶対に生き延びて帰ってこい。それ以外は許さん
…いいな？」

「…はい！」

普段は容赦ない閃武さんも、この言葉に温かさを感じた。最終選別へ行ったまま戻ってこなかった者達は数多くいる。あのやり過ぎと思える厳しさも、全てはこれ以上弟子を失いたくない気持ちで一杯だったかもしれない。

翌日、俺は身なりを整えた後、翡翠色の七宝つなぎ調の羽織を纏う。閃武さんから貸し与えられた日輪刀を帯刀する。これで準備は整った。

「行ってきます、閃武さん！」

「ああ。生きて帰ってこい。」

俺は閃武さんにそう言うと、藤襲山に向けて出発した。

選別 — SPARTAN —

田んぼ道を渡りながら、俺は最終選別の会場である藤襲山に向かう。

藤襲山：鬼殺隊入隊における最終選別の舞台。閃武さん曰く、あの山には鬼が苦手とする藤の花が一年中狂い咲きしているらしく、藤の花が結界の役目を果たしているという。言うなれば鬼の牢獄だ。藤襲山には腕利きの剣士に捕らえた鬼が閉じ込められており、最終選別はその「鬼の牢獄」の中で七日間生き延びる事が目標という事だ。

「にしても…田舎とはいえ、警察なんか来ないよな…？」

廃刀令などどつくの昔に施行されているこの明治末期。当然とはいえ鬼殺隊は非公式の組織：謂わば秘密結社。普通に帯刀しているところを見られようものなら即お縄だ。入隊したら何処かで適当な竹刀袋を手に入れよう。少なくとも偽装にはなるだろう。

「ん？」

藤襲山を目指して歩いていると、同じく藤襲山に向かっていていると思われる少女の姿があった。花柄の着物を着ており、帯には育手から拝借した日輪刀を下げている。そして頭には微笑んでいるような狐の面をつけている。

「ねえ、その君。」

「？」

「もしかして、君も藤襲山に？」

「うん。最終選別に向かう途中なの。」

「そうか。」

どうやらこの少女も最終選別に向かっているらしい。この可憐な

少女が、鬼殺隊に入るための試練に。

「俺は豪鵠森羅。」

「私は真菰。よろしくね、森羅。」

「ああ。」

俺は真菰と名乗った少女と共に藤襲山に向かう。

鬼殺隊には殆どが男性の隊員だが、少人数ながら女性の隊員もいる。恐らく真菰のような弱い少女も隊員の中にはいる。家族のいない、あるいは家族を失った孤児が殆どだろう。俺はその両方に当てはまる。

鬼という存在は非常識な強さを誇る。相応の年月を費やしながら鍛練を重ねてやっと鬼に立ち向かえる人間と違い、鬼は喰らった人間の数だけ強くなる。つまり、やろうものなら短期間で強くなれる。それが人間と鬼の成長の差異だ。

「そういえば、森羅はどの呼吸を使うの？ 私は水の呼吸を使うんだけど。」

「俺か？俺は風の呼吸を使う。」

「そうなんだ：風の呼吸は使い手が少ないと聞いた事はあるけど。」

「まあ水の呼吸と比べたら、あまり使い手は多くないな。」

真菰は水の呼吸を習ったらしい。閃武さんが言うには、呼吸の流派は水の呼吸の使い手が一番多いらしい。器によって形を自由自在に変えられる水の如く、臨機応変に対応できるのが一番の理由とのこと。

一方、俺が習った風の呼吸は攻撃に重点を置いた技が特徴。踏み込みからの強力な一撃を放つ炎と違い、風はその手数と範囲で鬼を木っ端微塵にする。厳密に言くと、俺には風の呼吸に加えて未完成の「宙の呼吸」というものがある。完成にはある程度実戦を重ねないといけないが、それは追々やっていけばいい。

「真菰、その狐のお面は？」

「これは私の師匠がくれたの。厄除の面っていうの。」

「厄除けか…。」

あの狐の面は厄除けのため師匠から貰ったものらしい。最終選別に挑んだ…縁起は少しでも良い方が無難だ。

俺にも御守り的なものはある。あの日からずっと持ち続けているあの髪留めだ。形見になってしまったが、俺にとっては大事なものだ。

「…森羅？」

「…あ、ごめん。少しボーツとしてた。さあ、早く藤襲山へ行こう。」

「うん…。」

いつの間にか無意識のうちに髪留めを出してしまったようだ…彼女への未練が二年立っても俺の脳裏から離れない。

俺は真菰に声を掛けられて我に返ると、髪留めを懐に仕舞いつつ、目的地である藤襲山へ向かう。

「どうして女の子の髪留めなんて持ってるんだろう？」

—————

「うわあ…：藤の花がいっぱい咲いてるね。まだ花が咲く季節じゃないの？」

藤襲山に辿りついた俺達。閃武さんから聞いた通り、山には藤の花

が狂い咲きしていた。俺達は藤の花を観賞しながら頂上へ登る。

「一年中狂い咲きしてるって事は、ずっと藤色を保ってるって訳なのか…?」

「そんな事分かるの?」

「なんというかその…『勘』なんだよ。いくら最終選別に藤襲山が使われるといっても、ずっと肥料撒いてる訳じゃないだろうし。多分、この山自体の養分が豊富なんだと思う。」

「へえ。実は森羅は風水師だったりするの?」

「いやいや、俺は風水師じゃないよ。」

俺はそこまで風水に詳しくないからなあ…。

けど、二年の修行の副産物なのか、第六感がある程度働くようになっていった。これで危険を察知したり、今のように地面の養分を感じ取ったりと、戦闘にも日常にも使える。

「この藤の花って持って帰れるのかな?」

「いや流石に駄目だろ…鬼殺隊の所有地だし、勝手に取ったりしたら怒られるかもしれないぞ?」

「むう…森羅は堅いなあ…。」

いくら何でも、人んこの物を勝手に取っちゃだめだからね。そもそも藤の花自体、単なる園芸じゃなく鬼の侵入・逃亡を阻害する大事な効果があるからね。万が一何かあつたら大変だ。

「最終選別を無事に終われたら、その担当の人に交渉してみるよ。それでいいかい?」

「うん。ありがとう、森羅。」

藤花は最終選別を乗り切ってから交渉してみるって事で話がついた。持って帰っていいかは話は別だが…。

「まあ…似合うから俺はありだと思っただけ。」
「へっ…？」

俺の言葉で、唐突に真菰の顔がほんのり赤くなった。別に俺はごく普通な事を言ったただけなんだけどなあ…？

……ってか、妙に距離感が近いな…。

そんな雑談をしながら階段を登っていくと、柱に囲われた広場に着いた。そこにはざっと30人以上の志願者達がおり、そして奥の最終選別へと続く入り口には白髪と黒髪の着物を来た双子の“少女”が提灯を持って立っていた…いや、黒髪の方は…“少年”か？なんで女装なんてしてるんだ？これも厄払い的な何かか？

「おい見ろよ、ガキまで最終選別受けるようだぜ。」

「ここはガキが容易く挑むような場所じゃねえよ。」

「ってか、隣のやつなら分かるけど、あのチビに鬼の頸斬れんのか？斬れねえだろ。」

「どの道喰われて死ぬのがオチさ。ま、俺は“安全に入隊したい”からそんな“子供”に構ってられないけどな。」

……おい野郎共、今なんて言った？確かに真菰は周りから見たら小柄だけど、ガキとかチビとか、鬼の頸斬れないとかよく言えたもんだな…？そんな大口叩けるんならてめえらは鬼の頸を容易く斬れるんだな？…ああ？

そして“安全に入隊したい”とかほざいたやつ、てめえは何しに最終選別に来た？金と権力のためだったらすぐに回れ右して帰りな。
“バラバラになりたくなければな”。

俺は真菰を嘲笑うガキ共に青筋を浮かべる。だが俺よりも不機嫌なのは、やはり嘲笑の対象になっている真菰だ。鬼と戦う鬼殺隊に入るための最終選別。それ故に心のないクズ共に嘲笑われた真菰は、顔

を強ばらせながら若干涙目になっていた。

そんな彼女に、俺はポンツと頭を置いて撫でる。

「し…森羅…？」

「気にすんなって。後で鬼やあいつらに目にもん見せてやればいいだけだよ。」

「今遠回しに私を子供扱いしなかった？」

「…けど少なくとも、俺は真菰を嘲笑ったりはしない。」

「えへへ…ありがとう。」

真菰の頬がまた若干赤くなった…なんだろうな…なんか旗が上がつていつてるような感覚は気のせいかな？

そして野郎共はその減らず口を叩き続けている。あんなホラ吹き共は放っておくのが一番。そもそも試験自体が命を落とす事のある内容故に、嘲笑してられるのも今の内だ。次の瞬間に萎縮間違い無しだ。

「ちよっと皆…いくら何でも女の子に向かって暴言はよくないよ！」

どうやら一人、こちら側に加勢した者がいたようだ。減らず口を叩く野郎共に注意する少年だ。加勢してくれるのは本当にありがたい。

「ん…？」

俺はふと見ると、入隊志望者達の中に一人の少女の姿が紛れ込んでいた。着物を来て、なおかつ「緋色の長い髪」をした少女だった…え？

「…？」

硬直している内にやがて再び視界から外れてしまった。緋色の髪

の少女……………今は……………もしかして…?

……………いや、気のせいだよな…? あいつはあの日…。

「森羅?」

「…はっ…!? えっ、えつと…何だ?」

「そろそろ始まるよ?」

真菰に言われて我に返った俺はある方向を向くと、先程の双子が選別場への入り口に立った。どうやら最終選別が開始されるようだ。もう夜だし、始まるならそろそろかと思っただが、ようやくか。

「皆様、今宵は最終選別にお集まり下さってありがとうございます。この藤襲山には鬼殺の剣士様方が生け捕りにしました鬼が閉じ込められてあり、外に出る事はできません。」

「山の麓から中腹にかけて鬼共の嫌う藤の花が〃一年中狂い咲いている〃からでございます。」

双子の主催者が交互に説明する。やはり鬼を隔離する目的で藤の花が狂い咲きしているらしい。もしかしたらの話だが、〃藤の花を用いて鬼を仕留める方法〃ができるのかな?

「しかし〃〃〃〃から先には藤の花が咲いておりませんから鬼共がおります。この中で七日間生き抜く。」

「それが最終選別の合格条件でございます。では、いつてらっしゃいませ。」

その一言と共に、俺達は鬼達がいるフィールドに一斉に走り出す。最終選別の合格条件は七日間生き抜く事。つまり、鬼を倒さずとも七日間生き抜けばいい。

そんな甘い世界じゃない。鬼を倒せる技量を持たなければ、この先を生き残れない。

「森羅、お互いに生き残ろうね。」

「ああ。真菰も気を付けろよ。」

俺と真菰はそう言つて別れ、他の者達と同じく四方八方に散開した。

—————

四方八方に志願者達が散らばり、俺は何処かで休める場所を探す。七日間生き抜くためには、水や食料を自給自足しなければならぬ。

「何処かに水源があれば七日間は保つだろうけどな…。」

俺はそう呟きながら、野宿出来そうな場所を求めて山中を歩く。すると

「ケケケツ！来たぞ、獲物が来たぞ！」

「どけよっ！俺がそのガキを喰う！」

「ああっ!?!最初に俺が見つけたんだ！てめえらは邪魔だ！」

俺の目の前に、餌を求めて三体の鬼が姿を現した。肌が色白く、角を生やしている、竜人族のような耳など、普通の鬼と共通する部分だ。三体の鬼は俺を見つけるや否や、我先に喰おうとする者同士で口喧嘩していた。

閃武さんが言うには、鬼同士は互いに同族嫌悪しているらしく、例外を除いて群れて行動する事はないという。その上、飢餓の末に共食いまでするらしい……憐れだよな、基本的に不死身なのにカニバリズムも止さなければならぬなんて……。

「それなら一番先にあいつを喰えばいい話だあ!!」

呉越同舟とはこの事か、鬼達は一番先に俺を喰おうと一斉に飛びかかってきた。

俺は刀を鞘から抜く。閃武さんから借用した緑色の刃を持つ日輪刀だ。

刀を構えながら『シィアアアア』と旋風の如き音を鳴らして心肺に、血潮に、肉体に、骨格に酸素を取り入れる。

「(全集中・風の呼吸 壱ノ型 塵旋風・削ぎ!)」

ズババババツ!!

刀に風のエフェクトを纏い、俺は目の前にいる三体の鬼に向かって地面を抉りながら突撃する。

俺の体を覆う螺旋状の風は刀と共に鬼の肉体を斬り裂き、宙へ舞った。その際、『硬い何か』を斬り裂く感覚が右腕に伝わった………斬れた………鬼の頸を斬れた”。二年前までは鉞を振るっても斬れなかった鬼の頸が、今は斬れる………地獄の鍛練は決して無駄じゃなかった。これなら………いや待て、頸を斬れた感覚は『二体分』だった。もう一体は……?

「邪魔者はいなくなったア!あのガキは俺の獲物だああツ!」

俺は足を止めて振り返ると、一体だけ頸が斬れてない鬼がいた。残った鬼は競合相手がなくなった事をチャンスと見立てて、欠損した手足を再生しつつ、重力に身を任せて俺に向かって落下してきた………悪いが、鬼の胃袋の中はごめんだ。

「(肆ノ型 昇上砂塵乱!)」

俺はそのまま地面を巻き上げる勢いで生き残った鬼をその頸ごと木っ端微塵に斬り裂いた。

頸を断たれた鬼は断面の端から黒く炭化して消滅していく。日光を浴びた鬼が、日輪刀で頸を斬られた鬼が辿る末路は同じだ。

「…よし、一先ず片付いたな。」

いちいち鬼の最期を吊つてもいられない。鬼は人の血肉を求めて志願者達を襲ってくる。休息できる場所を探そう。可能な限り水源が近い場所を。

—————

しばらく歩いていると滝の音を聞こえたため、俺はすぐに音の聞こえる方へ走る。

…ビング。音のする方へ辿り着くと、そこには滝が流れる水源があった。それに、水溜まりには淡水魚も何匹か泳いでいる。この近くなら食料と水には困らないだろう。寝床は…付近の木々を利用する他ないな。洞穴だと鬼が潜んでる可能性が高いからな。

俺は一旦水を飲もうと滝に近づく。

「あ、よかったあ。ここなら水不足に悩まされなくて済むよ。」

俺より遅れてもう一人滝に近づく者がいた。あの時、真菰を嘲笑っていた野郎共に注意を行った少年だった。

「ん？君は…。」

「よう、あの時はありがとな。」

「いいよいいよ。女の子を嘲笑うあいつらが許せなかったただけだから。」

「えーと…名前だったっけ？」

「僕は御影輝満（みかげ てるみ）だよ。」

「豪鵠森羅だ。」

輝満と名乗った少年と共に水を飲む俺達。心無い野郎共に注意する姿勢をとった輝満。対面して第一印象最悪な奴らばかりの中、輝満は信用してもいいと感じた。

「にしてもさ、あいつらは心が無いのか？真菰を嘲笑ったりして…。」
「仕方ないよ。今の時代、戦後故に不景気だからね。人身売買も止まないところもあるそうだし。」

戦後故に国全体が不景気…しかも人身売買も平然と行われてる…この国はそこまで荒んでたのか…。

「つてことは、あいつらが最終選別を受けたのは金のためか？」

「十中八九そうだろうね。鬼を倒せる実力さえあれば、給料も出るし、生活も安定する。」

なるほど…確かにハンターも鬼殺隊も似ている部分はある。ハンターがモンスター達を倒せばギルドから報酬が出るように、鬼殺隊員が鬼を倒せば上から給料が出る。俺が古龍だった頃にも、金目的でハンターになった奴らと対峙した事は幾度もあった。その度に振り返り討ちにしてやったが。

安全に入隊したいとかほざいていたあの「犀の目野郎」の心情にも頷ける。不景気故に稼げる抛り所が鬼殺隊しかないから、という事だろう…：…：…：そんな安全に出世が望める甘い世界じゃないんだ

よ。この世界も、あっちの世界も。

「そういえばさ、なんで輝満はこの最終選別を受けた？」

「僕はね、外国に憧れてるんだ。」

「外国？」

「うん。僕の家系は冒険家で、色々な世界を旅しているんだ。僕は世界中を旅したい。鬼殺隊に入隊しようと思ったのも、旅路用の路銀を手に入れるためと、自分を鍛え直すためなんだ。」

「へえ〜でも、それだったら呼吸や剣術を修得する必要はないんじゃないか？」

「ははは…甘いよ森羅。外の世界だと、『吸血鬼』という鬼と似たような存在がいるって噂があるからね。その点でも全集中の呼吸を学んだ方が無難だよ。」

吸血鬼かあ…俺のいた世界で吸血鬼というと、かの毒怪竜や喰血竜みたいなのが連想してくる。なるほど…全集中の呼吸は所謂『退魔の剣』みたいな役割があるのか…。

輝満が鬼殺隊に入る目的は、外国へ冒険するための路銀と身体能力向上、それから外国の知識の勉強か…。世界を冒険……大きい夢だな。

そう聞くと古龍だった頃を思い出す…龍気を用いて音速で空を飛んでいたからな…。

「森羅はどんな夢を持つてるの？」

「え？」

俺の夢……か……古龍としての俺はただ本能に身を任せて悠久の時を生きていただけ……そして生まれ変わった今では、全てを奪った鬼に対する『復讐』しか、俺の頭にはなかった……夢なんて、そんなもの抱いたことすらない。

でも……細やかなものならあるか。

「夢…とは言い切れないけど、今はこれかな。」

俺はそういつて懐から一冊の手記を出す。宙の呼吸の研究ノートだ。

「それは？」

「全集中・宙の呼吸。これを完成させる事が俺の今の目標だな。」

「新しい呼吸の開発かあ。すごいね！」

「そうか？俺の師匠から聞いたら、派生は珍しい事じゃないと言ってたけど。」

「それでも、自分自身で新しい呼吸を作るのは凄いと思うよ。」

呼吸の派生自体は珍しくない。それは閃武さんとの鍛練の際に聞いた事だ。剣士がどの呼吸に適しているかは各々の日輪刀の色で分かるらしく、その色の呼吸に適していなければ別のやつを使うか自力で編み出すしかない。

「その内完成すると思うから、夢でも何でもないけどな。夢とかそういうのは、俺は一度も考えた事なかったからな…。」

「まあ、鬼殺隊に入ると夢を考えるとところじゃなくなるからね。気持ちは分からなくもないよ。でも、鬼との戦いが終わった後の事も考えてみるのも、悪くないと思うよ。自分の人生を、楽しく過ごすためにね。」

「戦いが終わった後か…考えてみるよ。俺も…その後の事を。」

「うん、きつと見つかるはずだよ。」

そう言うと、輝満は立ち上がる。一ヶ所に固まると鬼達が寄ってくるのを察したからだろう。

「じゃあ森羅、また後でね。」

「ああ。」

そうして輝満は俺との挨拶を交わした後、別の場所へと去っていった………鬼との戦いが終わった後………かあ………。

俺に、その後なんて…あるのかな…？元は古龍という、後先考えず生存本能に従って生きてきた俺に………。

そうだ、一つ思い出したな…空の“もつと先だ”。空の向こうの……“宇宙”に憧れていたな。

古龍だった頃も、空の遥か先にある宇宙にまでは届かなかった。だからこそ、宇宙に強い憧れがあった。その記憶は生まれ変わってから薄れていたけど、前世での夢も捨てたもんじゃないな。その憧れを形にしたものが宙の呼吸なのかもしれない。自分にも“夢”はあったんだな…。

—————

最終選別から6日が経った。次の夜明けまで生き残れば、最終選別は合格となる。

最終選別の間、何体か鬼と遭遇したものの、問題なく倒した。それ以外は俺は水を汲んだり魚を獲ったり、宙の呼吸の型を開発したりして過ごしていた。

「あの二人…大丈夫かな？」

真菰と輝満はどうしてるんだろうか…まさか鬼に喰われたりしてないよな？…いや、駄目だ……二年前の光景を思い出してしまう…これ以上兎追いするのはやめよう…。

人間に生まれ変わると、こうも心配症になってしまうものなのか………っ!?

「…っ!?!」

刹那、俺の中で何かが危険を察知した。誰かが鬼に襲われてるのか…!?!

俺は急いでその場所へ走る。何時でも刀を振れるようあらかじめ抜刀しておく。

「き、聞いてないぞ！何で大型の異形の鬼がここにいるんだよ!?!」

俺が向かっていると、反対側から「異形の鬼」から逃げてきた少年と鉢合わせた……気配が妙に濃いと思ったけど、異形の鬼…つまり、血鬼術が使える鬼か…!

「どうした!?!」

「おい、お前も逃げた方がいい！あっちには異形の鬼がいるんだぞ!」

「誰か戦ってるのか?」

「ええっと…女の子だ。『狐の面』を付けた…。」

「っ…!!」

刹那、俺は我武者羅に疾走する。逃げてきた少年の制止など知った事か。

真菰だ……あいつが今、異形の鬼と戦っている…!

嫌な記憶がどうしてこうも容易くフラッシュバックしてくるんだ

……昴斗家を一夜で失ったトラウマが連想してしまう…!

頼む、無事でいてくれ…真菰…!!

—————

私は今、目の前にいる大型の異形の鬼と対峙している。先程襲われていた男の子を助けてあげた私は、代わりにあの鬼に向けて刀を構える。

『おい、その狐の面を付けた小娘、鱗滝の弟子だな？』

「!?…鱗滝さんを知ってるの？」

『知ってるも何も、俺をこんな牢獄に閉じ込めたのはあのクソ野郎だからなあ…！』

私の師匠である鱗滝さんを「クソ野郎」と罵倒する程に憎悪に満ちた声。

『十一、十二…そしてお前で十三人目だ。』

「何のこと…？」

『俺が喰らった鱗滝の弟子の数だ。あのクソ野郎の弟子はみーんな喰い殺すって決めてるからなあ。厄除けの面とか言われてるが、実際はそれを付けたせいで俺という鬼に喰われて死んだ。鱗滝が殺したようなものだ。まさに災厄って訳だ。』

「!?」

鱗滝さんの弟子達を…喰い殺した…？私がああ岩を斬った時、最終選別に行かせる気はなかったと鱗滝さんは言っていたけど、これが原因だったってこと？…：…：…：目の前の「クソ野郎」が…鱗滝さんを散々悲しませた元凶…！

『小娘、貴様も俺の手で喰い殺してやる。鱗滝への見せしめとなれ！』
「黙れ…アンタのようなクソ野郎が鱗滝さんを馬鹿にするなあああ！！」

私は憤怒に染まったまま、目の前の鬼に向かって突撃する。

こいつのせいで、私の兄弟子達は帰ってこなかった…師匠が今まで育ててきた弟子達が最終選別から帰ってこなかった。

だから…ここであの鬼を仕留める…!

異形の鬼はその体に何本も生やして巻き付けた腕の一部をこちらへ飛ばしてくる。師匠は言っていた…鬼は人を食べた数だけ強くなり、次第に怪しき術…“血鬼術”を使ってくると。あいつは、兄弟子達も含めて数十人は人を喰らっている…。

ならば、私が皆の無念を晴らすまで…!

私は一旦呼吸を整えて『ヒュウウウウ』と波風のような音を立てて、大量の酸素を身体に取り入れる。

いけない、怒りで呼吸が乱れるところだった。呼吸が乱れたらあいつに喰い殺される…落ち着いて、柔軟に…!

「(全集中・水の呼吸 玖ノ型 水流飛沫・乱!)」

私は鬼が放ってきた腕をジャンプして乗り、その腕の上を駆けていく。鬼が繰り出してくる無数の腕を飛び乗っていきながら、鬼の頸へ目掛けて全速力で走る。

こいつを倒して、師匠の…鱗滝さんのもとへ帰るんだ…!

『くくく…なかなかすばしっこい狐だ…なあ!』

「っ!?…ぎゃっ!」

鬼が不気味な笑みを浮かべると共に、突如として地面から生えてきた新しい腕によって、叩き落とされてしまった。

地面に叩きつけられた影響で、全身が痙攣する…だめ…こんなところで止まっちゃだめ…!

「…ああ…!」

鬼はそれを見て間髪入れず私の手と足を掴んで拘束した。

動けない……！力が強すぎる……！

『狐ごときが、喰い殺すのは容易だ。だが、俺は非常に機嫌が悪い。鱗滝の奴に、慶応の頃からこの牢獄の中で閉じ込められてから長く経つからなあ……！』

私を拘束した鬼は師匠への憎悪を吐き続けた。そして次の瞬間、鬼の視線は卑しく不気味なものなり、私はそれに恐怖を感じた。

一体……何をやる気なの……？

『そうだなあ……今まで喰ってきた鱗滝の弟子達の中に“女の餓鬼”はいなかったなあ……だから……！』

ビリイイイツ！

「えっ………？」

鬼の手が私の方へ近付いてきたや否や、私の着ていた着物を引き裂いた……直後に露出する私の裸体。

『ただ腕や足を引き千切っても面白くない。お前はただでは殺さない。もっと惨めに弄んでからだ……！』

「っ……嫌っ……！やめて……やめてよお………！」

私の脳裏に浮かんでくる光景……手足を千切られるどころじゃ済まない屈辱……！

犯される……！嫌だよ……！死ぬ前にこんな酷い仕打ちを受けるのは嫌……！！

助けて………

助けてよお………森羅………！

『鱗滝に引き取られた事を後悔するんだなあ！』

「い………いやああああああああああああああああああああああ
！！」

ズバアアアツ！！

『ぐうっ!?』

私に向かってその手が届く事はなかった。横から飛んできた誰かによって、その腕を切断されたからだった。

真菰が異形の鬼と交戦しているという情報を聞き、俺はさっきの少年が逃げてきた方向へ全速力で突っ走る。

「……あいつか……！」

捉えた。奥にゴ布林みたいな色の巨体を持ち、無数に生えた腕を身体に巻き付けている異形の鬼だ。あいつが異形の鬼か………!!?

「真菰……!!」

俺は別の方向を見ると、異形の鬼に拘束された真菰の姿があった。そして鬼は今まさに、手を下そうとしていた。

このままだと、真菰が死ぬ……

俺が閃武さんに引き取られる前は、無力なままで、家族すら守れなかった……けど……俺はもう二年前とは違う……!

俺は全力疾走した上で目の前の木を思いっきり蹴り、その勢いで滑空しながら、真菰に向かって飛んでいく鬼の腕に突撃する。

俺はその際『キュイイイイイイン!』と、かつて古龍の頃と同じ、そして閃武さんとの鍛練を積む前に行っていたジェットエンジンの如き甲高い呼吸音を鳴らして酸素を取り入れる。刹那、刀は星雲と彗星を連想させる光のエフェクトを纏う。宙の呼吸……まだ未完成だが構まない!

「(全集中・宙の呼吸 壱ノ型 天狼双星!)」

『ぐうっ!?!』

俺は双子の狼の如き闘気を刀に纏わせつつ、二発の斬撃を鬼の腕に叩き込んで切断した。

俺は切断した鬼の腕を蹴りつけて、鬼のもとへ滑空。着地と同時にその場の地面を刀で擦り、砂を巻き上げながら『シィアアア』と風

の呼吸に切り換える。

「(全集中・風の呼吸 陸ノ型 黒風烟嵐!)」
『ぐうっ!?くっ…目がっ…!?』

俺は巻き上げた砂を陸ノ型を用いて更に巻き上げる。頸は斬らない。まずは鬼の目を一時的に怯ませる。

そして鬼の身体を蹴って滑空し、今度は拘束されている真菰のもとへ向かう。

俺は真菰を拘束している腕を切断した。

「よつと…。」

俺は拘束を解かれた真菰を抱えて着地した。

「怪我はないか、真菰。」

「…森…羅…わ、私…私…う、うええええええ…。」

助けた否や、真菰は泣き出してしまった。相当怖い思いをしたのだろう…言動から察するに、酷く狼狽してしまっている。

俺は泣いている真菰を慰めっていると、あるものに視線が入った。ビリビリに引き裂かれた“花柄の布切れ”があちこちに散らばって… “そういう事か” …。

『ぐううっ…! 貴様ああ! よくも邪魔してくれたな!? 折角鱗滝の弟子を殺せると思っただのにいいい!』

「…黙ってるよ屑。」

目くらましから立ち直って逆上する鬼に、俺はドスの効いた声で返した。

「それがなんなんだよ。お前、自分が何したか分かってんのか？女の子にこんな事しやがって…斬られる覚悟あるんだろうな…!？」

目の前の糞野郎…あいつは真菰を犯してから殺そうとしやがった…絶対に生かしておけない…!

俺は目の前の「腕戦車」と対峙する…だが、その前にやっておく事がある。真菰だ。今の彼女は現在、あの野郎に着物を破り捨てられて裸の状態だ。

「これを羽織って帯で絞めて。」

「森羅…。」

「隠れてて、俺が奴を仕留めるから…。」

俺は着ていた羽織と右肩に纏掛けしていた二本の帯を外し、それを真菰に渡す。泣き疲れて目元が涙で赤く腫れている真菰。最悪廃人になりかけたんだ。致し方ないだろう。

真菰から視線を変え、目の前の「腕戦車」に向ける顔は…「憎悪と憤怒」だけだ。

元々龍は憤怒を象徴とする生き物。それは古龍だった俺にも当てはまる。龍の如く怒り、爪で肉を引き裂き、顎で骨を咬み砕き、息吹で有象無象を焼き尽くす…それが俺だ。

「おいクソ野郎、小便是済ましたか？仏に参拝は？山の麓でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？」

刀を構えて宣戦布告。恐怖など、狼狽など、微塵もない。

『…調子に乗るなよ餓鬼があああああ!!』

とことん傲慢な腕戦車。逆上しつつ俺の周りに無数の腕を地面から生やしてきた。

「(全集中・宙の呼吸 拾壹ノ型 森羅万象)」

刹那、俺の視界は青くなり、物体がトラッキングされると同時に熱分布を表すようになった。全集中の呼吸は一度に大量の酸素を取り込み、それらを身体中に循環させて身体能力に瞬間的なブーストを掛ける技術だ。森羅万象はその取り込んだ酸素を全て脳に循環させる。これにより、鬼の行動パターン、血鬼術の解析を効率化させる。

あいつの体には目に見えるように無数の腕を体中に巻き付けて鎧として機能させている。それらを展開して文字通り手数で攻めてくるのだらう。弱点となる頸周りには腕が何重も巻き付いており、硬い頸も相まって断ち斬る事が困難になっている。

「っー」

森羅万象を解除し、俺は酸素を身体中に循環させると、迫り来る腕を凌ぎながら突き進んでいく。鬼の再生力は凄まじい。いくら腕を切断しても再生する。ジリ貧になる前に突っ走る…現状それだけだ。

「(風の呼吸 壹ノ型 塵旋風・削ぎ!)」

螺旋状の風を纏いながら突撃し、迫り来る腕を次々にズタズタにしていきながら距離を縮める。このまま頸をぶった斬る…!

俺はそのまま接近しようとしたその時…

「っ…!？」

地面からの違和感を感じ取り、すぐさまブレーキを掛けて後ろに下がる。

すると、地面から腕が何本も生えてきた…あいつ、植物のように地面から腕を生やす…いや違う、腕を地面に隠していたのか。森羅万象を使って奴を分析してたけど、確かに地面にも妙な熱源があった。

地面を経由して伸びた腕はこちらに向けてまっすぐ迫ってくる。俺は跳躍中だ、普通なら避ける事は出来ない。

『くっくっくっ…空中では避けられないぞ餓鬼…!』

腕戦車は勝利を確信したかの如く不気味な笑みを浮かべていた。

俺は宙の呼吸に切り換えると、空中で身体を捻らせて姿勢を横にしていく。

腕戦車の腕の一本が俺の身体をギリギリで横切っていく、左手に持った刀に向かっていく。俺は鬼の腕が刀にぶつかる直前で刀を反転させて峰の方を向けた。

刀は横から強い衝撃を加えられるとあっさり折れる。これは閃武さんから執拗に教わった基礎だ。宙の呼吸を考案する際、俺は逆に考えた。『峰に真っ直ぐに衝撃が加わるとどうなるか』。

答えは単純、威力が強くなる。鬼の怪力を受け流してそれを反撃に用いる…それこそ…!

「(宙の呼吸 伍ノ型 光帆!)」

『何っ!?!』

腕戦車の腕が刀に接触。その怪力を受け流して迫ってくる腕を一気に切断した。

宙の呼吸が未完成である現状、これは一か八かの賭けだった。光帆

は本来、森羅万象をフルで活用して相手の行動を見切らないと刀が折れてあの世逝きの反撃技だからだ。

俺は着地すると、一旦真菰のもとへ行く。俺が指示した通り、羽織を深く羽織って二本の帯で締めている。一本は腰回りに、もう一本は左肩から襷掛けで……………うん、これ以上は触れないでおこう。

「動けるか？」

「うん…多少は痛むけど…。」

俺が駆けつけた時はかなりの力で拘束されていたはずだ。あまり無理をさせず、離れた場所に逃げるよう言うのがいいな…。

『糞餓鬼共めえ…バラバラに轢き潰してやるう!!!!』

刹那、逆上した腕戦車は切断された腕を再生すると、そのままこちらに向けて走ってきた。その光景は、まるで“やばいものを加えられて突然変異した薔薇”のようだった。

「離れる真菰！」

左右に別れて腕戦車の突進をかわす。俺は迫り来る腕を凌ぎながら突き進む……………って、何で真菰も突撃してるんだ!?

「何してるんだ真菰!?早く逃げろ！」

「あいつは、鱗滝さんの…私の兄弟子達を殺した!だから、ここで…皆の仇を取る！」

真菰の兄弟子達を殺した…!?そういや、さつき逃げてきた青年は異形の鬼がいるとは聞いてないって言ってたな…もしやあの鬼は、真菰の師匠…鱗滝という人に対する怨念だけでここまで生きてきたって事か…奴にとって鱗滝さんの弟子達を喰らう事が、鱗滝さんに対する

一種の報復になるという訳か…。

真菰はその連鎖を断ち切ろうとしてる。仇を取るために…師匠である鱗滝という人のもとへ帰るために…。

「事情は分かった。けど、危なくなったらすぐに逃げろ！」

真菰だけであの鬼の頸を斬れるとは思えない。素早さはあるとはいえ、女性故の非力さがある。それに、拘束された影響で身体にダメージを負ってるはずだ。だったらやる事は一つ、彼女を援護する。あの腕戦車の頸をぶった斬るために！

「(水の呼吸 漆ノ型 雫波紋突き!)」

腕の上を走る真菰は波風のような呼吸音を立てて酸素を取り込むと、迫り来る腕に対して突きを繰り出した。刹那、腕戦車の腕に波紋が生じて威力が相殺された。

「っ…はっ！」

斬ってもキリがない腕。多くは凌げないと判断したか、真菰は一旦腕を飛び降りて地上に着地しようとする。

『かかったなアホがあ!』

着地狩りを狙おうとしたのか、腕戦車は着地地点に多くの腕を生やす。俺がいる事を忘れんなよ？

「(風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹!)」

俺は地面に生えた腕の中を潜り、それらを竜巻の如く斬り刻んだ。『障害物』を撤去した事で、真菰は問題なく着地した。

「ありがとう、森羅。」

「礼は後だ。あの野郎の頸を断つぞ。」

「うん。」

俺と真菰は腕戦車に向かって突撃する。腕戦車は切断された腕を再生して再びこちらに飛ばしてきた。

「ふっ、はあっ！」

迫り来る腕は俺が次々斬り裂いていく。これぐらいの腕の数なら何の問題もない。

「森羅、背中借りるよ！」

「ああ、行け！」

鬼の腕を斬ったところで俺は前のめりの態勢になる。そこを真菰が俺を踏み台にして跳躍し、再び腕戦車の腕を走っていく。俺もすぐにダッシュして腕戦車との距離を詰める。あともう少し……！

『ぐうっ……！とつとと死ねよ虫ケラアアアアア！』

どこまでしつこいのか、腕戦車は俺と真菰の双方に大量の腕を飛ばしてくる。性懲りもないなあいつ……。

「（水の呼吸 玖ノ型 水流飛沫・乱！）」

「（風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹！）」

真菰は鬼の腕を次々飛び移りながら攻撃を掻い潜り、俺は迫り来る腕の数々を木っ端微塵にして突き進む。腕戦車が切断された腕をすぐに再生。俺達に向けて大量に飛ばそうとしたその時

「はあっ!!」

ザシユツ!!

『ぐわあああああっ!め、目があああああ!!?』

何者かが腕戦車の目を潰した。その瞬間、俺と真菰に向かってくる腕が全く違う場所にぶつかっていく。

あの黒髪の少年…もしかして…!」

「輝満!」

「森羅、今だ!」

「ああ!」

咄嗟に駆けつけてくれた輝満のおかげでチャンスを得た俺と真菰。目の再生、それから腕を戻すのには少々時間を要するらしい。再生と準備をさせる機会なんて与えない。これで決着をつける!

真菰は腕から本体の方へ跳躍していく。俺は腕戦車の近くまで寄

ると、低い姿勢を取りながら宙の呼吸を行う。あいつの動きを見て察した事が一つある。奴は“頸周りの腕”だけは絶対に動かさない事だ。真菰だけじゃ頸を斬れないというのはこれが理由だ。恐らく保険だろう。腕を防具代わりに頸の防御力を高めているんだ。頸を斬るのを失敗したところをバラバラに引き裂こうというあいつなら考えている計算だろう。だったら、その“腕の鎧”を剥がすまでだ…！

「(宙の呼吸 陸ノ型 火箭・青龍鉤！)」

真上に跳躍すると同時に、頸を守っていた腕を切断した。だが気を抜くな。頸を斬れなきや、全てが水の泡だ。

俺は風の呼吸に切り換えながら、腕戦車に向けて滑空する。真菰も跳躍した状態から鬼の頸を斬る態勢に入った。これで終わりだ…お前の頸を…断ち斬る!!

『弱小者の餓鬼共があ!!俺があ…:…貴様ら如きにいいいい!!』

「(水の呼吸 壺ノ型 水面斬り!)」

「(風の呼吸 捌ノ型 初烈風斬り!)」

ズバアツ!!!

『ぐわああ…!』

二つの斬撃は、頑丈な腕戦車の頸を断ち斬った。鬼の頸が宙を舞

い、そして地面に落ちる。

腕戦車の頸の断面から徐々に消滅が進行していく。

『ぐう…ううつ…！鱗…滝……めえ…！鱗…滝……！』

消滅していく中、腕戦車は最期まで鱗滝に対する呪詛を延々と唱えて、跡形もなく消えた…。

俺達は最終選別の中、異形の鬼を討った。それだけの達成感を感じ取れる。

「ありがとう。森羅がいなかったら私、あのまま兄弟子達の仇すら取れずに…。」

「おいおい、もう過ぎた事は言うなよ。仇は取れたんだし、何より大怪我なくてよかったよ。」

あの鬼を倒して兄弟子達の仇を討った。その心情はにこやかな笑顔で想像が出来る。

「おーい、森羅ー！」

「輝満、お前も無事だったんだな。」

「うん、異形の鬼から逃げてきた人から、二人が戦ってるって聞いたから急いできたんだ。いぎ来てみたらびっくりしたよ。選別の最中であんな大きな鬼がいるなんて予想外だったからね。」

輝満でさえ驚くのも無理はない。この最終選別には人を2、3人喰った程度の鬼しかいないと聞いた。けど予想外など何処にでもある。特に生存本能と執念だけで何十年も生きてきた先程の鬼は。

「ねえ森羅、この人は？」

「輝満の事か。あの輩共に注意してた子だよ。」

「やっぱりそうだったんだ。私は真菰。よろしくね。」

「御影輝満だよ。うん、よろしく真菰ちゃん。」

そんなこんなで、自己紹介が終わった。すると輝満は俺のもとへやってくる。小声で話すつもりなのか、俺に顔を近づける。

「ところで森羅。」

「ん？」

「真菰ちゃんの服装、選別開始の「〃そっから先〃を言うな、いいな？」
…うん、察したよ…。」

何か察したのか、静かに返事をした輝満。駆けつけたばかりだったから状況知らないのは仕方ないが、そこから先は触れてはいけない…嫌われ者になりたくなければ。

「ん？…もう日の出だね。」

「確か、7日間経ったはずだから、これで合格だね。」

「ああ、広場に戻ろうか。」

そうこうしてるうちに、日の出が出てきた。これで晴れて入隊か…
ようやくか。

俺達は選別開始前の広場に戻ろうとしたその時

シユルルル…バサツ…

「ん……？」

「へっ……？」

刹那、何か地面に落ちる音がした。それに反応して俺は「振り向いた」……いや、「振り向いてしまった」。

「……………あっ……………（汗）。」

「は……………ううう……………！」

そう、「襷掛けしていた帯」が解けて落ちており、その影響で……………って、しまった……………!!

「そ、そっ、いや輝……満……あれ……？」

俺は振り返ると、輝満がいない事に気がついた。

あの野郎、一人だけで逃げやがったあああああああああ
!!!!!!??

「う……………うううう……………！」

「はっ……!？」

また振り返ると、いつの間にか涙目で顔を強ばらせ、刀（勿論納刀してある）を構えた真菰が……………あっこれ、もうアカンやつだ…。

「まっ……真菰……真菰さん……………これはその……………不可抗力とか何というか……………勘弁しな」

「この……………馬鹿あああああああああああああああ
!!!!!!」

メメタアアア!!

「ボ ル ボ ロ ス ツ！」

真菰の会心の一発が見事に俺の顔面に直撃。その衝撃で俺は地面に倒れ伏した。羞恥心が有頂天まで昇ってしまった真菰は涙目で頬を膨らませながらスタスタと歩いていった。

どうして：どうしてこんなにも締まりが悪いんだ……。
（ ） ・ ω ・
（ ）